情報化社会・メディア研究
第 2 巻刊行の辞

放送大学副学長　柏倉康夫

放送大学に着任して 3 年がたった。昨年度 1 年間は、千葉学習センター所長として、多くの学生の方々に接し、また面接授業や修士論文の指導を通しても共に学び、啓発しあう機会をもった。それらを通して私が得た感想は、「学生諸氏は学ぶこと関して実に貪欲だ」ということである。今日、知識基盤社会の構築がいわれるが、放送大学の役割はまさしく高度で知的な素養をもつ人材の養成であって、多くの学士と並んで、この 2 年間に 700 名を超す修士号取得者を送り出した。提出された修士論文の一部は、「Open Forum」という報告書にまとめられており、これを読むと、取り上げられたテーマがヴァラエティーに富み、しかも社会経験に裏打ちされた地に足の着いたものが多いことに気づく。

私が主催するゼミナール「情報化社会研究」でも、平成 16 年 3 月に修士号を取得した第 1 期生、平成 17 年の第 2 期生をあわせると、21 名の修士が誕生した。第 1 期生の修士論文を集つめた論集に次いで、このたび『「情報化社会・メデイア研究」第 2 巻　2005 年』が刊行される運びとなった。収録された論文 9 篇は力作ぞろいである。

情報化社会を迎えたいま、情報は毎年倍々の勢いで生み出され、かつて 20 年は有効とされた大学で学んだ知識はたちまち陳腐化してしまう。私たちのゼミに集った人たちは、こうした現実を踏まえて、日々の職業生活のかたわら、資料を収集し、フィールド・ワークを行い、それを分析して論文にまとめあげたのである。

毎朝 4 時起床を日課として、家族が起きてくるまでの時間を論文制作に当てたもの、テレビ局でのニュース番組制作の激務の合間をぬって国立国会図書館に通い、占領下のアメリカ側の資料を読破してなった論文、身近に接する若い学生たちの情報行動を跡づけた論考など多彩である。ここに収録された論文はネット上でも公開されているが、第 1 号に続いて論文集の形で刊行することとした。いずれにせよ論文の評価は、成立のプロセスではなく、それが新たな知見をもたらし得たかどうかで決まる。判定はお読みいただく方々に委ねたい。